

ダニエル書 - 第七十三番

歴史的類似の解明：ヤロブアムの欺瞞とアドベンチスト運動の信仰の試練

Jeff Pippenger

2024-02-06

北王国と南王国は、レビ記二十五章と二十六章の破られた契約の成就として、神の憤りのもとで二千五百年間、散らされていた。最初の憤りの終わりから最後の憤りの終わりまでの四十六年間は、1844年にそれら二つの王国が霊的な現代イスラエルという一つの王国へと集められることを象徴していた。これら二つの国の集めは、エゼキエルが一つに合わせた二本の棒と、エリヤの物語でザレファテのやもめが集めた二本の小枝によって表されていた。1844年10月22日、北王国と南王国の預言的歴史は終結し、そのことによってそれら二つの王国の始まりの歴史が繰り返された。

ヤロブアムは、臣民がユダへ赴き、エルサレムの聖所で神を礼拝するのを防ぐため、北王国に偽りの礼拝制度を設けた。

ヤロブアムは心の中で言った。「今や王権はダビデの家に戻ってしまうだろう。もしこの民がエルサレムの主の家に上っていけにえをささげるなら、この民の心は再びその主人、すなわちユダの王レハブアムに向き、彼らは私を殺して、再びユダの王レハブアムのもとに帰ってしまう。」そこで王は相談し、金の子牛を二頭作って民に言った。「あなたがたがエルサレムに上って行くのは大変だ。イスラエルよ、見よ、これがあなたをエジプトの地から導き上ったあなたの神々だ。」彼は一つをベテルに据え、もう一つをダンに置いた。このことは罪となった。民はその一つの前で拝むために、ダンにまで行ったからである。彼は高き所のための家を造り、レビの子孫ではない民のうちの最も卑しい者たちを祭司に任じた。ヤロブアムは第八の月の十五日に、ユダにある祭りに似た祭りを制定し、祭壇でいけにえをささげた。彼はベテルでもそのように行い、自分が作った子牛にいけにえをささげ、また自分の造った高き所の祭司たちをベテルに配置した。こうして彼は、第八の月の十五日に、すなわち彼が自分の心で考え出して定めたその月に、ベテルで自分が造った祭壇の上でいけにえをささげた。彼はイスラエルの子らのために祭りを制定し、祭壇でいけにえをささげ、香をたいた。列王記上12:26-33。

彼の礼拝制度はカトリック（異教）に典型的であった。というのも、アロンの背信のときと同様に、獣への像、すなわち獣そのものの像を据えたからである。二体の子牛の像は金で作られ、バビロンを象徴していた。その像はエジプトの神々に奉獻され、アロンがそう呼んだのと同様に、「彼らをエジプトの地から連れ出した神々」と見なされた。彼は二つの町に二つの祭壇を築いたが、それらを合わせて考えると、教会（ベテル）と国家（ダン）の結合を表している。その祭壇は真の祭壇、すなわちキリストの偽物であり、ちょうどカトリックが自らを地上におけるキリストの代表と称するのと同様である。彼は墮落した祭司職を立てたが、カトリックの司祭たちも同様である。彼は礼拝のために、神の真の祭りの日のいずれとも明確に異なる日を選び、それによって真の礼拝日と偽りの礼拝日をめぐる論争を表している。

彼の偽りの礼拝制度の発足に際し、神はユダから一人の預言者を、彼のにせの礼拝制度を戒めるために遣わした。

すると、見よ、主の言葉により、ユダから神の人がベテルに来た。ヤロブアムは香をたくために祭壇のそばに立っていた。彼は主の言葉により祭壇に向かって叫んで言った。「祭壇よ、祭壇よ、主はこう言われる。見よ、ダビデの家に名をヨシヤという子が生まれる。彼はおまえの上で、この上で香をたく高き所の祭司たちをいけにえとしてささげ、人の骨がその上で焼かれる。」その日、彼はしるしを与えて言った。「これは主が語られたしるしである。見よ、祭壇は裂け、その上にある灰はこぼれ出る。」列王記上 13:1-3

ユダから来た預言者は、将来のヨシヤ王の誕生を指し示す三つから成る預言を宣言した。彼は、ヨシヤが偽りの祭壇で仕えていた邪悪な祭司たちを殺し、その祭壇の上で人の骨をも焼くことを予告した。また彼はヤロブアムにしるしを与え、ヤロブアムの祭壇が裂けて灰がこぼれ出ることを示した。これらのことはすべて主の言葉どおりに成就したが、ヤロブアムは預言者の宣言を聞いて怒り、預言者に対処しようとした。しかし神が支配しておられた。

そして、ベテルの祭壇に向かって叫んだ神の人のことばを王ヤロブアムが聞いたとき、彼は祭壇から手を伸ばして「彼を捕らえよ」と言った。すると、彼に向かって伸ばしたその手は枯れてしまい、自分のもとに引き戻すことができなくなった。祭壇もまた裂け、灰が祭壇からこぼれ出た。これは、主のことばによって神の人が示したしるしのおりであった。列王記上 13:4, 5。

そのしるしはただちに成就し、ヤロブアムの手は麻痺した。

すると王は神の人に答えて言った。「どうか今、あなたの神、主の御顔の前に取り成して、私のために祈り、私の手が元のとおりになるようにしてくれ。」神の人が主に願いを求めると、王の手は再び元のとおりになり、以前のようになった。王は神の人に言った。「私の家に来て、休んで元気を取り戻しなさい。私はあなたに報いを与えよう。」しかし神の人は王に言った。「たとえあなたが家の半分をくださっても、私はあなたと一緒にいかない。この場所ではパンも食わず、水も飲まない。主の言葉によって、『パンを食べるな、水を飲むな、来た道を同じ道で引き返すな』と私に命じられているからだ。」それで彼は別の道を行き、ベテルへ来た時の道を通っては戻らなかった。列王記上 13:6-10

イエスはいつも、物事の終わりをその始まりによって示す。そして、民族としての古代イスラエルにおける北王国と南王国の成立は、二本の棒が一本に合わせられるという歴史の中で終わりに至り、それは霊的な現代イスラエルという国を表している。

二本の棒が結び合わされた歴史において、1798年の終わりの時に、三段階の試験過程が開始された。真夜中の叫びにおける聖霊の注ぎに先立って、二本の棒（王国）は共に集められていた。1844年春の第一の失望のとき、プロテスタントはこの試験過程に失敗してカトリックの娘たちとなり、こうしてヤロブアムによって型示されていたように、偽りの礼拝制度を再び打ち立てた。

宗教改革は、神がローマ教会の迷信・伝統・慣習から荒野の教会を導き出すために成し遂げた御業であった。マルティン・ルターの時代以来、ますます多くの真理が明らかにされ、ツロの淫婦が、偽りのキリスト教の信仰告白で覆われた異教的礼拝制度にすぎないことが示された。主は、御自分の民がエジプトで奴隷であったときにそうされたように、捕らわれの民を暗闇から連れ出すことを御旨とされた。主は彼らに御自分の律法を与えるために、エジプトの束縛から彼らを解放された。ところが、プロテスタントたちは、1798年に封印が解かれ、ますます強まった知識の光に従うことを拒んだため、1844年における律法とキリストの真の聖所の働きを認めることができなかった。

彼らが審判の時のメッセージを拒否したことは、彼らがローマ教会の娘たちとなったことを表しており、その後、彼らは聖書において偽預言者（背教的プロテスタント）と特定されている偽りの礼拝制度を打ち立てた。1844年10月22日に信仰によって聖所に入った忠実なミラー派の人々は、第三天使の光を受け、異教の根本的伝統、すなわち太陽崇拝を保持しつつプロテスタントであると公言する偽りの礼拝制度を譴責した。ユダからの預言者は、1844年10月22日に到来した第三天使のメッセージを認識して掲げたミラー派アドベンチズムを象徴していた。

預言者に自分の家に来て休息するようというヤロブアムの申し出に直面したとき、その預言者は、主から自分に与えられていた具体的な指示を述べた。その命令はミラー派アドベンチズムにも与えられていた。その命令は、来た道を引き返してはならない、というものだった。そしてミラー派アドベンチズムはプロテスタント諸教派から出てきた。彼らは1844年春の最初の失望のときにプロテスタントから分離させられた。また、エレミヤはユダの預言者に与えられていたのと同じ指示の一例を示している。

あなたの言葉が見いだされ、私はそれを食べた。あなたの言葉は私にとって、私の心の喜びと歓喜となった。私はあなたの名によって呼ばれているからだ、万軍の主なる神よ。私はあざける者の集いに座らず、喜びもしなかった。私はあなたの御手のゆえにひとり座った。あなたが私を憤りで満たされたからである。なぜ私の痛みは絶えず、私の傷は癒えることを拒み、治りがたいのか。あなたはまったく私にとって偽り者のように、尽きる水のようになられるのか。それゆえ、主はこう言われる。もしあなたが立ち帰るなら、私はあなたを再び連れ戻し、あなたは私の前に立つようになる。もし卑しきものから尊いものを取り出すなら、あなたは私の口のようになる。彼らがあなたのもとへ帰るようにせよ。あなたは彼らのもとへ帰ってはならない。私はこの民に対してあなたを堅固な青銅の城壁とする。彼らはあなたと戦うが、あなたに勝つことはできない。私はあなたとともにいて、あなたを救い、あなたを助け出す、と主は言われる。私は悪しき者の手からあなたを救い出し、恐ろしい者の手からあなたを贖う。エレミヤ書 15:16-21

第二の災いの時の預言が1840年8月11日に成就したとき、黙示録10章の強い御使いが、手に開かれた小さな巻物を持って降りてきて、ヨハネは行ってその巻物を取り、それを食べるように告げられた。歴史のその時点でその小さな巻物を食べた人々をエレミヤが表しており、その言葉は蜜のように甘かった。なぜならそれは彼の「心」の「喜びと歓喜」だったからである。しかし神の「御手」によって、エレミヤは「憤り」に「満たされ」、彼は「傷つけられ」「絶え間ない痛み」に苦しんだ。神の「御手」のために、エレミヤは、

神は自分にとって「偽り者のよう」であり、また「尽きる水」のようであったと訴えた。主は1843年の図表のいくつかの数字の誤りを、その「御手」で覆っておられた。

エレミヤは、ハバククの幻が遅れたときにミラー派が味わった最初の失望を表している。エレミヤに象徴される人々には、「雨」と表されるそのメッセージが失敗したように見えた。しかしハバククは次のように述べていた。「その幻はなお定めのためのもので、終わりには語り、偽りはない。たとえ遅れても、それを待て。それは必ず来る、遅れることはない。」エレミヤは神が偽った、そしてメッセージ（雨）が失敗したと思ったが、ただ遅れていただけだった。

そのとき、神はエレミヤにこう告げられた。「もしあなたが立ち帰るなら、わたしは再びあなたを立たせ、あなたはわたしの前に立つであろう。もしあなたが卑しいものから尊いものをより分けるなら、あなたはわたしの口のようになる。彼らをあなたのもとへ立ち帰らせよ。だが、あなたは彼らのもとへは立ち帰ってはならない。」その失望の後、エレミヤは、メッセージが失敗したかのように見えたときに生じた落胆を振り払い、主に仕える務めへ立ち帰らなければならない神の民を代表していた。エレミヤが定められた要件を満たすなら、神は彼をご自身の代弁者として用いられるであろう。

現在の私たちの研究にとってより重要なのは、彼の失望を「喜んで」いた「あざける者たちの集会」について神がエレミヤに告げたことである。神はエレミヤに、あざける者たちはエレミヤのもとに戻って来ることができるが、エレミヤは決して彼らのもとへ戻ってはならない、と告げた。エレミヤは、カトリックへ回帰することを選び、バビロンの娘たち、すなわちバアルとアシタロテの偽預言者となったプロテスタントに対して立ち向かった者たちを代表していた。さらにエレミヤは、預言の系譜の同じ地点で、北王国の始まりにヤロブアムの偽りの礼拝制度を戒めたユダの預言者を象徴しており、それによって、北王国の歴史の終わりにカトリックを写し取った偽りの礼拝制度が導入されることを予表していた。ヤロブアムが同盟を結ぶことを申し出たとき、その預言者は、食べたり飲んだり、来た道を引き返したりしてはならないと彼に告げた。

そして王は神の人に言った。「私の家に来て、休んで元気を回復しなさい。私はあなたに報酬を与えよう。」すると神の人は王に言った。「たとえあなたが私に家の半分をくださっても、あなたと一緒に行くことはしない。この場所ではパンも食わず、水も飲まない。主の言葉によって、『パンを食べるな。水を飲むな。来た道を通って戻るな』と私に命じられているからだ。」列王記上 13:7-9

ユダの預言者の言動は、エリヤの物語におけるバアルとアシタロテの偽預言者たちの働きと一致している。もちろん、ミラー派の歴史はエリヤの歴史でもある。なぜなら、ミラーはエリヤだったからである。エリヤの物語では、バアルとアシタロテの偽預言者たちは欺きの踊りを演じたが、神から火が下ってエリヤの供え物を焼き尽くしたとき、それが愚かさであることが露わになった。こうして、その出来事は、ミラー派の歴史における真夜中の叫びでの聖霊の注ぎを予表した。その歴史の対決は、第二のエリヤであるバプテスマのヨハネが、ヘロデヤの娘（サロメ）が演じた欺きの踊りの最中に臨んだ対決を表していた。ヘロデヤはイゼベルによって予表され、イゼベルはカトリック教会の象徴である。

1844年、プロテスタント諸教会はヘロディア（イゼベル）の娘サロメとなった。欺きの舞のさなか、ヘロデは王国の半分を与えると約束したが、それは彼の誕生日のことであった。これは、十部族から成る北王国の王であるアハブに象徴される十人の王たちが、終わりの日に自らの王国を教皇権（イゼベル）に与えることに同意することの型である。「王国の半分を与える」ことは同盟の象徴であり、ユダから来た預言者は、背教の王と同盟を結んだり、その偽りの礼拝制度を支持したりすることは決してしないのだと、ヤロブアムにはっきり告げていた。

それは、主がエレミヤにも告げられたことでもある。すなわち、「『あざける者の会衆』（背教的プロテスタンティズム）はエレミヤのもとへ立ち返ることができるが、エレミヤは決して彼らのもとへ立ち返ってはならず、また来た道に戻ってはならない」と言われたときのことである。だが、そのユダの預言者はまさにそのことをしてしまった。彼はユダへ戻る前-与えられていた務めを終える前に-、偽りを語る偽の預言者に欺かれたからである。

さて、ベテルに年老いた預言者が一人住んでいた。その日のベテルで神の人が行ったすべてのこと、王に語った言葉を、彼の息子たちが来て父に告げた。父は彼らに、「彼はどちらの道へ行ったのか」と言った。彼の息子たちは、ユダから来たその神の人がどの道を行ったかを見ていたからである。そこで彼は息子たちに、「わたしのろばに鞍をつけよ」と言った。そこで彼らはろばに鞍をつけ、彼はそれに乗って神の人の後を追ひ、彼が櫛の木の下に座っているのを見つけた。彼は彼に言った、「あなたはユダから来た神の人ですか」。彼は言った、「そうです」。そのとき彼は彼に言った、「わたしの家に来て、パンを食べなさい」。しかし彼は言った、「わたしはあなたと一緒に戻ることも、あなたと一緒に家に入ることもできません。この場所でああなたと共にパンを食べることも、水を飲むこともできません。主の言葉によってわたしに告げられました。『そこではパンを食べず、水を飲まず、また来た道を引き返してはならない』と」。彼は彼に言った、「わたしもあなたと同じく預言者です。主の言葉によって御使いがわたしに語りました。『彼をあなたの家に連れ戻し、パンを食べさせ、水を飲ませよ』と」。しかし彼は彼に嘘をついた。そこで彼は彼と共に引き返し、彼の家でパンを食べ、水を飲んだ。彼らが食卓についていたとき、彼を連れ戻した預言者に主の言葉が臨んだ。彼はユダから来た神の人に向かって叫んで言った、「主はこう言われる。『あなたは主の言葉に背き、あなたの神、主があなたに命じた命令を守らなかったのだから、それなのに引き返し、主があなたに「パンを食べるな、水を飲むな」と言われたその場所で、パンを食べ、水を飲んだのだから、あなたの遺体はあなたの先祖の墓に葬られることはない』」。

彼はパンを食べ、飲み終わると、彼のためにろばに鞍を置いた。すなわち、彼が連れ戻した預言者のためであった。彼が去って行くと、道で一頭の獅子が彼に出会い、彼を殺した。彼のなきがらは道に投げ出され、ろばはそのそばに立ち、獅子もまたそのなきがらのそばに立っていた。すると、人々が通りかかり、道に投げ出されたなきがらと、そのなきがらのそばに立っている獅子を見た。彼らは来て、年老いた預言者の住んでいる町でそのことを告げた。彼を道から連れ戻した預言者がそれを聞くと、言った。「それは神の人だ。主の言葉に背いたゆえに、主は彼を獅子の手に渡された。獅子は彼を引き裂き、殺した。これは主が彼に語られた言葉どおりである。」彼は息子た

ちに言った。「私のためにろばに鞍を置きなさい。」彼らはろばに鞍を置いた。彼は行って、道に投げ出されている彼のなきがらと、そのなきがらのそばに立っているろばと獅子とを見つけた。獅子はそのなきがらを食べもせず、ろばを引き裂きもしなかった。預言者は神の人のなきがらを拾い上げ、それをろばに載せて連れ帰った。年老いた預言者は町に帰り、彼を悼み、葬った。彼は自分の墓にそのなきがらを納め、人々は彼のために嘆いて「ああ、わが兄弟よ！」と言った。彼を葬った後、彼は息子たちに言った。「私が死んだなら、神の人が葬られている墓に私を葬ってくれ。私の骨を彼の骨のかたわらに置いてくれ。ベテルの祭壇に対して、またサマリアの町々にある高き所のすべての家々に対して、彼が主の言葉によって叫んだ言葉は、必ず成就するからである。」列王記上 13:11-32。

次の記事でこの研究を続けます。

神の力が何が真理であることを証しするとき、その真理は真理として永遠に立ち続けるべきである。神が与えられた光に反する、その後のいかなる仮説も取り上げてはならない。聖書の解釈を掲げ、彼らにとっては真理だが実は真理ではないものを主張する者が起こるのであろう。この時のための真理を、神は私たちの信仰の土台として与えておられる。何が真理であることを、神ご自身が私たちに教えてくださったのである。ある者が、さらに別の者が、新しい光を携えて起こるが、それは神がその聖霊の明らかな証しによって与えられた光に反するものである。この真理が確立される過程で得られた経験を通してきた者たちのうち、今なお生きている者が少数いる。神は恵みによって彼らのいのちを保ち、使徒ヨハネが生涯の終わりまでそうしたように、彼らを通ったその経験を、いのちの尽きるまで繰り返し、繰り返して語り続けることができるようにしておられる。そして、世を去った旗手たちは、その著作の再版を通して語り続けることになる。このようにして彼らの声が聞かれるべきである、と私は示されている。彼らは、この時のための真理が何であるかについて証しをすることになっている。

私たちの信仰の特徴的な要点に反するメッセージを携えてくる者の言葉を、私たちは受け入れてはならない。彼らは大量の聖句を寄せ集め、自らの主張する理論の証拠としてそれらを積み上げる。こうしたことは、この五十年の間に幾度となく繰り返されてきた。聖書は神の言葉であり、尊重されるべきものであるが、もしその適用が、神がこの五十年間支えてこられた土台から一本でも柱を動かすようなものであるなら、それは大きな誤りである。そのような適用を行う者は、神の民に与えられてきた過去のメッセージに力と勢いを与えた聖霊の驚くべき現れを知らないのである。

G長老の論証は信頼できない。それを受け入れれば、私たちを今の私たちにした真理に対する神の民の信仰を打ち砕いてしまうだろう。

この件に関しては、私たちははっきりと態度を定めなければならない。というのも、彼が聖書によって証明しようとしている論点は妥当ではないからである。それらは、神の民の過去の経験が誤りであったことを証明してはいない。私たちは真理を持っていた。私たちは神の御使いたちに導かれていた。聖所の問題の提示は、聖霊の導きによるものであった。私たちの信仰のうち、自らが関与しなかった点については、誰もが沈黙を守るのが最も雄弁である。神は決してご自身と矛盾な事はない。真実でないことを証言させるために聖書の証拠を無理に用いれば、それは誤用である。次から次へと別の者が現れて、いかにも偉大な光をもたらしたかのようにして、自説を主張するだ

ろう。しかし、私たちは古き道標を堅持する。[ヨハネの第一の手紙 1:1-10 引用。]

「私は、今の時代にふさわしくこれらの言葉を用いることができると告げるよう指示されています。というのは、罪をその正しい名で呼ばなければならない時が来たからです。私たちの働きは、回心しておらず自分の栄光を求める人々によって妨げられています。彼らは、新しい理論を提示してそれが真理だと主張し、自分たちがその創始者だと思われることを望んでいます。しかし、もしこれらの理論が受け入れられるなら、それは、過去五十年間にわたり神がご自分の民に与え、聖霊の証しによってそれを立証してこられた真理を否定することへと導くでしょう。」 Selected Messages, book 1, 161.